

第3回小平市長期総合計画基本構想審議会 会議録（要旨）

開催日時	令和元年10月24日（木）午後3時から午後5時
開催場所	小平市中央公民館2階 講座室2
出席者	<ul style="list-style-type: none"> ・委員 20名 高橋裕子会長 栗山丈弘副会長 伊藤規子委員 加藤順子委員 金子恵一委員 神山敬次委員 川口幸子委員 川地保宣委員 齋藤啓子委員 市東和子委員 鈴木庸夫委員 竹田広輝委員 出口みちたか委員 橋本直子委員 古川満久委員 細江卓朗委員 松尾早智子委員 松田肇委員 宮奈彰男委員 矢口誠委員 ・事務局 3名 企画政策部長 企画政策部総合計画担当課長 企画政策部政策課長補佐兼総合計画担当係長 ・傍聴者 2名
会議次第	1 （仮称）小平市第四次長期総合計画の骨子案の検討
配布資料	<p>事前送付資料</p> <p>資料1（仮称）小平市第四次長期総合計画 骨子案の概略（案）</p> <p>資料2（仮称）小平市第四次長期総合計画 基本的な理念の検討</p> <p>資料3（仮称）小平市第四次長期総合計画 12年後にめざすまちの姿（将来像）の検討</p> <p>資料4 東京26市 総合計画の概要一覧</p> <p>資料5（仮称）小平市第四次長期総合計画 基本的な取組の方向性の検討</p> <p>資料6 取組の方向性の検討に向けた論点整理</p> <p>資料7（仮称）小平市第四次長期総合計画策定に係る全体スケジュールの概要（仮称）小平市第四次長期総合計画策定に向けた市民参加の取組</p> <p>当日配付資料</p> <p>第3回小平市長期総合計画基本構想審議会 検討用シートの取りまとめ（仮称）小平市第四次長期総合計画策定状況 ニュースレター</p>

開会	
1 （仮称）小平市第四次長期総合計画の骨子案の検討	
事務局	資料1から資料7に沿って説明。
委員	（質疑なし）
以降グループ討議（基本的な理念について）	
事務局	本日の検討内容である、「基本的な理念」、「12年後にめざすまちの姿（将来像）」、「基本的な取組の方向性」については、事前に委員の皆様から、お考え等について検討用シートに記入していただきご提出いただいた。それらを取りまとめたものが、本日配付させていただいた検討用シートの取りまとめである。

	理念についてだけでも、委員の皆様から様々な視点をいただいた。これらをまとめていくのは非常に難しい作業にはなるが、多くの市民の皆様にご共感していただき、小平市のまちづくりに参加しようと思っただけのような、そのような理念が打ち出せればと考えている。
会長	災害が予想をしていない規模で襲ってくるという経験を踏まえ、安全安心ということはどこに住んでいても考えなければならない問題であると感じた。
委員	住み続けるためには安全対策をしっかり行っていく必要がある。その基盤にたって、市民の生活やくらしがあるのではないか。
委員	武蔵野台地のほぼ中央に位置しているということも強みとして出しながら、災害対策、防災に関して、強化していくという決意を見せていくことは必要と感じる。
委員	緑という言葉がたくさん出てくるが、これが小平市の緑だという分析が必要。
委員	コミュニティスクールの考え方は、まちづくりの基本であると感じる。
委員	現在の技術革新、気候変動などの地球環境の変化等は経済や暮らしに関係する。理念は基本的に普遍的なものではあるが、変化に対応していくということ自体を理念にするという考え方もある。
委員	小平市の良いなと思うところは変わらないところ。小平市全体が緩やかで、都心でもなく、一方では利便性もよく、住みやすい。そういったところを大事にしていきたい。大きく発展をというよりは、緩やかな中での変化を。
委員	「若い方が魅力を感じるまち」という視点。多世代交流が進むとよい。高齢者と若い方が一緒に活動できる、一緒にまちづくりをするという、小平市はそういうアドバンテージを持っていると思う。
委員	市民一人ひとりがバラバラではなく、市民と行政との意見を結びつけていくことが重要。
委員	「みんなが元気で快適なまち」と「こどもの笑顔を支える」という2つを考えた。
委員	自治基本条例の前文は、基本的に小平市としてずっと目指していくことを表していると感じる。
委員	つながり、支え合い、助け合いという視点。多様な人が共に支え合って、生きやすい社会を目指す。
グループ討議 (12年後にめざすまちの将来像について)	
事務局	理念は、先人から受け継いできた小平市のまちづくりの思いを後世に伝えるということが役割としてあろうかと考えている。一方、将来像は市制施行100周年である2062年を見据え、その通過点としての12年間で取り組むべき方向性、ビジョンであり、やや具体的になろうかと考えている。12年たったときに、振り返り検証するものとなる。理念と将来像はそういった役割の違いがあると考えている。
委員	「働く場が増える」から一歩進んで、「仕事を創る」という視点があるとよい。
委員	多様性であるとか、東日本大震災などの未曾有の災害の認識は前回の長期総合計画では入っていない。第三次長期総合計画ではなかった視点を次の長期総合計画に入れていくということも必要かと考える。

委員	都市計画に沿って開発が進んでいくことも一つの将来像として考えられる。
委員	ある程度都市計画を進めるということと、自然環境の整備と、両方の視点が必要。
委員	道路の整備、老朽化した公共施設への対応等、安心して暮らせる視点が必要。
委員	お互いに支え合うまちという視点。そういう気持ちは急には涵養できないため、教育が重要と考える。小平市には知的な資源がたくさんあり、一步前に出た考え方が打ち出せるのでは。
委員	障がい者、子育て世代、高齢者、一人暮らし、子どもが安心して支え合って、助け合って、思いやりを持って住めるまちづくりと、それを持続できる仕組みを作っていくこと。
委員	支え合うとか助け合うというのは、防災上やこれからの災害時でも有効に機能していく。
委員	理念とビジョンの使い分けが難しいと思った。手法の話にはなるが、先に方向性や具体的な取組を固めて、それを一つの言葉で表す方法もあるかと思う。
委員	内容論的な事や方法論的な事も含め、様々な議論が行ったり来たりしながら段々将来像が固まってくるのではないかな。
グループ討議 (ひとづくりの分野について)	
委員	虐待などは以前から問題としてあったが、この十数年で過激になっていると感じる。そのことに対する取組が必要だと思う。
委員	子育て支援と教育は非常に重要な視点である。英語教育もますます重要となってくる。また、小平市民だけを育てるということだけではなく、小平市が好きで、行ってみようとか、参加してみようと思ってもらえる人を増やすことも必要。様々な地方から来る方、外国から来る方を含めると、住民基本台帳で捉えているよりもっと大きな数字になり、また違った世界が見えてくるのではないかな。
委員	小平市は「吹奏楽のまち」でもある。ひとづくりの分野に、表現や芸術文化といった視点も入るとよい。多世代交流等、様々な可能性を含んでいる。
委員	リタイアした方のリカレント教育などの視点が入るとよい。人生 100 年時代にも関係してくる。
会長	これだけ大学があるからこそ、生涯学び続けられるまちという考え方は重要である。
委員	学びイコール学校ではなく、市民の皆さんが気軽に参加できるような学びの仕組みも必要。
委員	学びの入り口は様々な用意されているように感じる。身近な入り口から入って、その先にもっと面白いものがあるというプログラムとのセットが、もっと学びたいということにつながる。
委員	図書館がもう少しオープンになって、調べあいやまちの情報センターのような場所になるとよい。
委員	人財とすると、人の能力といった要素が入ってくるので、人が育つまちとした方がよい。
会長	「まちの誇りを受け継ぎ、発展させる人財が育つまち」は発展させるだけではなく、

	生み出す人もつくっていかねばならないので、新しい価値や文化を生み出す人が育っていくというイメージが持てるとよいのではないか。
委員	ひとつづくりの分野では、世代や性別、国籍関係なく、多様な関係性の中で、一人ひとりの様々な興味や好奇心が地域課題の解決やまちづくりにつながっていくようなイメージを持っている。
委員	スポーツをすることで、人の繋がりができる発端ともなる。そういった人を増やしていくという考え方で、スポーツがひとつづくりの分野に入ることはよいかと思う。
委員	次世代を担う方々に課題とテーマを投げかけてみるということも必要ではないか。共通の志が一つできてくると、そこに向かっていくエネルギーが生まれる。学生時代にたまたま小平市にきたかもしれないが、「ふるさと」や「愛するまち」と思っていたきたい。これは学生だけではなく、シニアの方にも言える。実践の場が必要。人づくりは、自分が気づいて動くかどうかということになるのでは。
委員	全体で子どもの育ちを支援する、子育てする親を支援するといったことはひとつづくりに繋がる。また、小平市は図書館の蔵書数が多く、学びの環境はとても良い。図書館機能も様々に議論されているが、人が多く集まるような工夫ができればと思う。本を読むということ以外に、学生たちも含めて学びの場があると、また新たな何かが生まれるのではないか。様々な角度からひとつづくりということは考えられる。
会長	大学の図書館も、昔はラーニングコモンズとあって、図書館に入ったら飲食禁止で静かになるということになっていたが、現在は一緒に学びあう場所を設けるといった形に変わってきている。地域の図書館も同じように、図書館の機能が変化していくことになるのではないか。
委員	ひとつの場所に集まることでコミュニケーションが生まれ、人づくりができていくのではないか。場所を活用したい。
委員	小平市は公民館や地域センターなどの施設が豊富。また大学等も多い。こうした地域にある場所をいかに活用するか、PRするかということが課題。様々な要素がたくさんある。
会長	大学がこれだけあるということは、市民の方へのリソースがそれだけあるということである。それらを上手く活用できるとよい。人生100年時代といわれ、働く年数が増えてくる。高齢者イコール福祉ではなく、生涯学び続けられるまちであるということをもっと打ち出していけるとよい。
委員	世代別に整理して、その上で横串に学びや健康といったものを整理するというのも、取組の方向性ということでは考えていく必要がある。
委員	愛着形成や自尊心を育む乳幼児期に、母親を支援することが大切と考える。子育て家庭が孤立することのないよう、地域と関わりを持ちながら安心して子育てができる環境づくりが必要。
委員	情報が溢れすぎている。集まってコミュニケーションをとりながら共に人と人として学びあうことで、よりよい情報の収集につながる。そういった場が増えるとよい。
委員	これまで以上に資源や人を活用したい。未来を担う子どもたちをはじめ、大人にい

	<p>たるまで、教育と言われる分野に力を注ぎ、人を思ったり、地域を思う人の育成に力を入れていければと思う。一步前へ出て、皆さんが様々なことを吸収できる知的なまちでありたい。</p>
会長	<p>例えば大学の学園祭というと、以前は歌を歌ったり踊ったり、有名人が来たりといった場であったかもしれないが、現在では、インクルーシブ教育やセクシャルマイノリティに関する研究成果や展示等も行っており、多面的に様々なことを提供する場となっている。市民の皆さんにも新たな視点でご参加いただければと思う。</p>
委員	<p>小平市は学園都市こだいらとしてのキャッチフレーズがあるのに、活かされていないように感じる。小平市では様々な市民活動が展開されている。こうしたものと学園都市が融合することで、さらに伸びていくのではという期待感がある。学生や若い方々の知恵と行動力を活かす仕組みが、学生にとってのひとづくりとなるのではないか。</p>
委員	<p>少子化の原因を調べてサポートする体制を作ることが必要と考える。</p>
会長	<p>少子化を経験した国のうち、人口が増加傾向にある国から分かることは、多様なライフスタイルを認め合う、皆がそれを理解する社会の方が、子どもは育てやすくなるということ。</p>
<p>グループ討議（くらしづくりの分野について）</p>	
委員	<p>居場所があることで心が安らぐ、活力が湧いてくる。家庭や家族から一步踏み出した繋がりが必要。実はそういったことは災害の時に助け合うということにもつながる。安心できるようなくらしづくりといったキーワードが入るとよい。</p>
委員	<p>小平市には7つの駅がある。地域のお店のよさと合わせて最低限、生活に不便がないようにしたい。それがまた地域のコミュニティの拠点になったりする可能性もある。お店は、ただ物を売る場所、物とお金を交換するところではなくて、地域の人たちの交流の場所になる可能性があるということを入れていきたい。</p>
委員	<p>昔は家の縁側がそうだったように、ちょっとベンチがあるだけで会話が生まれる。商店街もそのような場になればよい。</p>
委員	<p>小平市は住環境がよい。テレワーク普及の流れもあるので、暮らすように働けるまちとして、20代、30代の方々に選ばれるまちになるとよい。</p>
委員	<p>市民活動を行う団体が多いというのを活かしたい。人が繋がって、支え合っという文化が根付いている。そういった活動を支える仕組みがあると、くらしづくりにもつながるのではないか。ひとづくりの分野にもつながることではあるが。</p>
委員	<p>居場所の重要性が言われている。産後のお母さんたちを支える活動をしており、人が溢れ返るほど集まっている。ニーズもあり、和みの場も必要とされているのだなと感じている。そういった市民活動の支援や市との協力体制が大切になってくると思う。また、一人ひとりの個性を尊重していく社会をめざしていきたい。</p>
委員	<p>自分が必要とされる、安心できる場所は、必ず誰にも必要であると思う。台風19号の際には、水害に遭われた地域で、皆が無事であった介護福祉施設があり、月に1回避難訓練をしていたと聞いた。学習したり訓練する場というのは是非つくって</p>

	いきたい。
委員	高齢者にとっては集う場があるというのが大切で、そこから情報を得ることができる。先日の台風がすごかったねとか、こうなったらどうしようかといった会話が生まれ、居場所が有効に機能してくる。そういう場所が現在 50 か所くらいある。しかしながら来る方は来るし来ない方は来ない。来ない方へのアプローチを考えたい。
委員	ひとづくりの分野、くらしづくりの分野、まちづくりの分野と、徐々に広い捉え方になっていく。くらしづくりでは、防災対策などの共通の目的や目標に向かったり、男女共同参画などの個別の部分での繋がりがあったりと、地域の一人ひとりがどこかには入れる、自分の居場所がここであると言える、その地域のくらしづくりに主体的に関われるようになるのではないかと。
委員	地域医療と総合病院との関連があまり視覚化されておらず、元気なうちに知っておくような仕組みがあるとよい。
委員	外に対する観光 PR だけではなく、今住んでいる人たちに対するインナープロモーションのような取組があるとよい。
委員	小平第二小学校には高齢者交流室があり、高齢者と小学生が交流する場となっている。こうした場合は、市が準備しても人が集まるのか、若い人たちが集まるのかといった課題はあるかとは思いますが、地域コミュニティであるとか共生社会などのきっかけづくりとしてあってもよいのではと思う。
委員	ひとづくりもくらしづくりもまちづくりも様々な意味で相互に被っている部分があり関連していると感じる。そうしたことから、文化もくらしづくりの分野に入るのはと考えた。生活から生まれる文化、緑から生まれる文化、そういった文化を大切にしながら暮らす、それが人との繋がりになり、そしてそれがまた新たな文化を生み育てていく、といったまちになっていくとよい。
委員	お祭りもよい文化である。商店街もそこで生まれた文化がある。そしてその商店街もまた活力を取り戻していく。そこには暮らしがあり、生活があるので、そういうものをうまく結び付けられるような環境整備ができればよいのではと考える。
委員	小平市は図書館が多いが、図書館に行くのも難しくなっている高齢者がいる。より身近な地域センターのような場に、週に 1 回でも移動図書館がやってくるというようなことがあれば、皆がそこに集まって居場所になる。そこに集まって、話して帰るといったような仕掛け作りが必要。
委員	家族のような小さなコミュニティも必要だが、それを維持していく為にどうするか。コミュニティを発展させて大きな組織を作るなどの視点で考えるのも大事かと思う。くらしづくりの分野では、小さなコミュニティの周辺を含めて大きな視点で捉えることも必要かと思う。
委員	国は、まち・ひと・しごと創生法でしごとの分野をつくっている。小平市はしごとの分野を立てる必要はないと思うが、生活維持という意味では、農業・商業や文化・観光はくらしづくりの分野に入れてもよいのではと思う。
委員	商店街とか消費生活というのはくらしづくりである。市民の皆さんの意見の中には、

	大型ショッピングセンターやショッピングモールなども多く出ている。一方で、農家の直売所や地産地消などの意見もある。市民の皆さんは、両方あるまちにしたいと考えているのだろうか。
委員	障害者差別解消法は、前回の計画段階ではまだ施行されていない。ダイバーシティも同様に、現在まで取り組んできた内容に加えて、これらの新たな視点に基づく考え方を整理したい。
委員	ITに関しては、特に高齢者の中には敬遠される方もいらっしゃるかと思う。しかしながら現在の生活において身近なものというスマートフォンになってくるので、それを使ったコミュニティも考えたい。実際に会うことが大事ではあるが、その前段階としてITを活用するということは今後の流れではないか。
グループ討議 (まちづくりの分野について)	
委員	災害に向けた公共施設の備えが必要。いざというときの安心を公共施設に期待したい。
委員	台風19号で体験したようなスーパー台風はこの先、温暖化に伴って増加する。
委員	小平市は田舎ではあるが、田舎の要素はそぎ取られてしまっているという事もある。「プチ田舎」の使い方は多面的に検討してほしい。
委員	たたき台にあるまちづくりの分野の考え方としての「快適で利便性の高い魅力あるまち」は非常に分かりやすく、さまざまな事が集約されている。快適な部分、利便性の高い部分というのをいかに小平市の各駅に集約していくか。駅前やはり利便性が高い部分であり、そのままグリーンロードやあかしあ通りなど快適空間につながるというようなイメージがあるとよい。
委員	高齢になると車で移動ができないので、バスなどを使う。自転車も走りづらい部分があり、改善できるとよい。若い方は都心で買い物をすると思うが、日用品くらいは地元で買うであろう。高齢になると近所で買い物を済ませるようになる。それを見据えて商店街も変わっていく必要がある。
委員	駅前の商店街に人を呼び込むには、公的機関としても図書館や市役所の窓口を駅近くに導入する方法も考えられる。人が集まると商店街にも足を運んでもらえるようになるのではないかと。まだ可能性がある。
委員	若い方はインターネットで買い物をされるので、地元で買うことが少なくなっているのではないかと。例えば巣鴨のように、高齢者向けの商店街としてターゲットを絞ることも考えられる。
委員	これから12年先と考えると、農地は継続して継いでいく人が少なくなるので、半減するのではないかと。その時に残る農地は、例えば観光農業になるのか。そういった事に少し焦点を当てていく必要がある。
委員	農地をいかに守っていくのかということは大切な視点である。観光農業や摘み取り等、積極的に取り組んでいる方もいらっしゃる。
委員	家の近くにグリーンロードがある。生まれた時からあるのでそういうものだと思う。ずっと暮らしてきたが、冷静に考えて、緑がずっとつながっている道とそれを取

	り巻く玉川上水というのはとても魅力的だと、先日歩いていてふと気付いた。反面、「プチ田舎」というキーワードに関しては、花小金井駅や一橋学園駅を利用されている方で「プチ田舎」だと思う方はなかなかいないと思う。利便性の面では駅や交通インフラを中心に進め、グリーンロードやその他の公園の緑を大事にする。メリハリをつけ両方を大切にするという政策がよいと思う。
委員	新たな緑の創出という視点で、住宅が増える事と緑が増える事をセットで考える必要がある。小中高大学生の方のインタビューからは、バス・電車・自転車等の交通インフラについての意見が多く、日常的にまちの中を移動して生活しているという感じが伝わってきた。高齢者も移動できるようなまちにする、またはそれほど移動しなくても済むようなまちにするのか、移動も歩きたくなるまちというのも一つのテーマだと思う。様々なレベルでの移動を豊かにするという事が必要ではないか。
委員	小平市では、市民の皆さんが太陽光発電など再生可能エネルギーの取組を進めている。循環型のエネルギーを小平市の中でどのように位置づけていくのかということも、12年間の中で示すことができればと考える。仕事を創り出すという点で、現在はシェアオフィスなど言葉があるが、12年後にはもっと違う、住んでいるところで仕事をするということが当たり前になるとよい。特に小平は大学が多く、大学を卒業してもこのまちの中で自分の専門分野を生かしていただきたい。
委員	都心では大型の開発が進んでいるが、やはり人間が住み続けられるためには、緑があって水があってそこにコミュニティがあることが暮らしやすい環境である。市民参加の取組で上位にあがっているキーワードである、「地域資源」、「発展・活力」、「自然・緑」を結び付け、様々な切り口からまちづくりを考えていく。そこから、多くの方に来訪者として来ていただければと思う。
委員	都市基盤を整備していく事と、水や緑や環境を守る、創るという事は相反する部分もあれば、相乗的に進める事もあり、どのようなバランスでやっていくのかというのがまちづくりの分野で常に抱えているテーマではある。
委員	小平は東西に長いということもあり、分散型の地域づくりという視点も必要。
委員	小平市は既に分散、多極化しているのではないか。花小金井駅、小平駅、鷹の台駅とそれぞれの駅が持つ要素の違いがあり、それぞれが小平市の中でうまく多極化・多様化している。そのような特性は活かし、それぞれの特色あるまちづくりをしていけるとよい。各地域の祭り等も生かしながら育っていくというのは小平らしいという感じがする。
委員	小平市は昔からへそが無いところで分散している。メリットとデメリットがあるとは思いますが、このままの姿でよいのではないかと思う。
事務局	小平市都市計画マスタープランの中では、花小金井駅、小平駅、小川駅の3つの拠点を創ることとし、現在小川駅西口及び小平駅北口で再開発事業を進めている。駅前には利便性を高め、それ以外の周辺は緑豊かなゆったりくつろげる空間とし、両面のよさを暮らしながら味わえるまちを目指している。
委員	小平市にある資源、よいところを伝えていくということをまちづくりの基本に考え

	ている。小平市の魅力である玉川上水や農地に関しても、楽しみながら一つのまちづくりの形としてデザインしていくことを進めていけるとよい。
委員	小平市は特に玉川上水と狭山・境緑道、野火止用水があり、地域資源を活かしたまちづくりとしてよい環境である。
委員	地域の中に計画的に商業、工業、産業ブースというものを造るといったグランドデザインが必要と考えている。せっきく大学が多数あり大学生の間は小平市にいても、住みたいまちにはなっていないため、結局出て行ってしまう。令和7年まで人口が20万人近くまで伸びるといふ小平市の今ならまだやれる事はたくさんある。
委員	都市計画公園の整備も進められていくが、地元のお店が出店したり、地域の若者のイベントブースとして使えるような発想になったらよい。大きいスペースができる時には、市民の意見を多く聞いて、広くアイデアを募ってもらいたい。
委員	相続で後継者問題など聞くと大変な状況は分かるが、農地の宅地化は何とかならないかと考える。
委員	都市農地貸借法の施行により、農地を持つ方と農作業をやりたい方をマッチングするというところまできている。荒れ地が少なくなり、手入れをされている農地が増えていくのではないかと考えている。相続で農地はどうしても少なくなってしまうが、農業をやっていただける若い方に貸借ができる。地産地消の観点から、手入れされた農地の農産物の需要も増えている。農産物直売所も、釣銭まで出てくる自動販売機ができており、千円札で100円の農産物が買える。また、災害の時には協力する農地ですという看板を出して対応をしていることもある。こうしたことから、農地が縮小していくということもあるが、できるだけ現状維持を進めたい。
委員	小川駅の再開発は早急にやってもらいたい。小平駅も。災害に強いまちという点では、小平市は下水道の整備を進めているおかげか、大雨でも水が溢れなくなっているように思う。
委員	桜の木の植え替えなども順次進めていると思うが、近年の災害もあり、早めの対策が必要である。
委員	例えば、農家の直売所にベンチを置いてコーヒーなども出して、農地保存、地産地消、コミュニケーションを一つの場で解決する。箱モノを建てるより、大きなお金をかけずともちょっとした工夫で一石三鳥くらいの解決策を見出したい。
閉会	